第９回　江戸川大学簿記コンクール【　問 題　】

第１問（30 点）

次の取引について仕訳しなさい。ただし勘定科目は、次の中から最も適当と思われるものを選ぶこと。

現金	当座預金	受取手形	売掛金
前払金	未収金	他店商品券	立替金
建物	支払手形	買掛金	前受金
預り金	商品券	貸倒引当金	建物減価償却累計額
資本金	損益	売上	受取利息
雑益	仕入	給料	支払家賃
租税公課	減価償却費	雑損	支払利息

１．当店が保有している愛知商店発行の商品券 180,000 円と、愛知商店の保有している当店発行の商品券 250,000 円を交換し、差額を現金で決済した。

２．得意先鹿児島商店に対する売掛金 320,000 円のうち、20,000 円は郵便為替証書で、290,000 円は同店振出の小切手で受け取った。残額 10,000 円については、以前に返品を受けていたが未処理であった。

３．得意先三重商店へ商品 4,000,000 円を引き渡し、代金のうち 400,000 円は注文を受けた際に受け取っていた手付金と相殺し、2,000,000 円は同店振出、当店宛の約束手形で受取り、750,000 円はかつて当店が振り出していた京都商店宛の約束手形を裏書譲渡され、残額は掛けとした。

４．従業員に対する今月分の給与総額 800,000 円から、先に立替払いしていた従業員の生命保険料 25,000 円と源泉所得税 68,000 円を控除し、残額を当座預金口座から従業員の普通預金口座へ振り込んだ。

５．沖縄商店の当期における総仕入高は 1,380,000 円、戻し高は 29,000 円、値引高 18,500 円、期首商品棚卸高は 123,500 円、期末商品棚卸高は 138,500 円であった。また、家賃の支払高は 300,000 円、期末における前払高は 60,000 円、借入金の利息の支払高は 60,000 円、期末における未払高は 40,000 円であった。よって、決算整理後の諸勘定高を損益勘定へ振り替えた。

第２問（10 点）

次の文章の（　①　）～（　⑩　）の空欄に当てはまる最も適当と思われる語句を下記の語群から選んで答えなさい。

１．簿記は、企業が行う経済活動を（　　①　　）するしくみである。企業の財産管理に役立ち、（　　②　　）の意思決定に役立っている。

２．（　　③　　）は、企業の一定期間における経営成績を表す計算書であり、（　　④　　）は、企業の一定時点の財政状態を表す計算書である。

３．あらかじめ銀行と、当座預金残高を超える一定限度額までの支払いをしてもらう契約を（　　⑤　　）といい、契約で定めた一定限度額を（　　⑥　　）という。

4．約束手形や為替手形を持っている人は、営業に必要な資金の融通を受けるため、支払期日前にその手形を銀行などの金融機関に持ち込んで換金することがある。これを手形の（　⑦　）という。 この場合、金融機関では割り引いた日から支払期日までの利息を手形代金から差し引き、残額を当座預金に入金する。この利息相当額は（　⑧　）勘定で処理する。

5．期首と期末の資本の額を比較することによって当期純利益を計算する方法を（　⑨　）という。これに対して、会計期間において生じた収益から費用を差し引くことによって当期純利益を計算する方法を（　⑩　）という。

経営者	損益法	精算表	当座借越契約
貸借対照表	集計	裏書譲渡	資本法
差額法	利害関係者	割引	支払利息
当座借越	当座勘定取引契約	記録	財産法
残高試算表	手形売却損	借越限度額	損益計算書

第3問（8点）

消耗品費の会計処理方法として、(1)支出時に全額を消耗品として計上しておき、期末に当期の消耗品の使用額を消耗品費勘定へ振り替える方法と、(2)支出時に全額を消耗品費として計上しておき、当期の未使用分を期末に消耗品勘定に振り替えてその差額を消耗品費とする方法の二つがある。

いま(1)の方法が採用され、その勘定記入が次のようになっている。

消　耗　品

1/6	現金	50,000	12/31	消耗品費	48,000
			12/31	次期繰越	2,000
		50,000			50,000

消　耗　品　費

12/31	消耗品	48,000	12/31	損益	48,000

これを(2)の方法で処理したとすれば、その勘定記入はどのようになるか（　　）にあてはまる勘定科目等または金額を記入し、(2)の方法による勘定記入を完成させなさい。

消　耗　品　費

1/6	現金	50,000	12/31	（　①　）	（　②　）
			12/31	（　③　）	（　④　）
		50,000			50,000

消　耗　品

12/31	（　⑤　）	（　⑥　）	12/31	（　⑦　）	（　⑧　）

第 4 問（10 点）

次の文章のうち、正しいものには「○」誤っているものには「×」をつけなさい。なお、全て「○」もしくは「×」と回答した場合には、全問不正解とする。

①	簿記上の取引とは、企業の資産・負債・純資産の増減に影響を及ぼす事象をいい、火災や盗難による財産の損害は、簿記上の取引とならない。
②	決算とは、期末に総勘定元帳の記録を整理し、帳簿を締め切り、精算表を作成する一連の手続きをいう。
③	過年度に貸倒れとして処理した債権の一部または全部が回収された場合には貸倒引当金戻入として処理する。
④	有形固定資産を売却したときには、取得原価と売価の差額を固定資産売却益または固定資産売却損で処理する。
⑤	当期純利益は、損益計算書上は収益と費用の差額として計算され、貸借対照表上は純資産の増加額として計算される。なお、追加元入れはないものとする。

第 5 問（22 点）

次に示した期末整理事項等について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は、**【答案用紙】第 6 問**の精算表で記載されているものを使用すること。なお、会計期間は平成 25 年 4 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日までの 1 年間である。

＜期末整理事項等＞

1．銀行で当座預金口座の残高を調べたところ帳簿残高より 6,000 円超過していた。原因を調べたところ手形代金 6,000 円が先方から回収され入金済みであったが、銀行からの連絡がなかったため未記帳であることが判明した。

2．仮払金は備品の取得に関するものであるが、当期の 2 月 1 日に据え付け、同日から利用しているにもかかわらず、取得の処理がされていなかった。

3．現金の実査を行ったところ帳簿残高より 1,500 円超過していた。原因を調べたところ売掛金 1,600 円を回収していたが未記帳であった。なお、残額については原因がわからないので適切な処理を行う。

4．売上債権の期末残高に対して４％の貸倒れを見積もる。なお、貸倒引当金の設定は、差額補充法による。

5．売買目的有価証券の期末時価は 10,800 円である。よって、時価法により評価替えをする。

6．商品の期末棚卸高は 32,000 円であった。売上原価は「仕入」の行で計算する。

7．消耗品の期末未消費高は 400 円であった。

8．備品について、耐用年数 5 年の定額法により減価償却を行う。なお、残存価額は取得原価の 10%である。また、当期に取得した備品も同様に減価償却を行うが月割計算を行う。

9．手数料の見越し分が 800 円ある。

10．家賃は、毎期同額を 8 月 1 日に向こう 1 年分として支払っている。

11．借入金は、前期の 2 月 1 日に期間 3 年で借り入れたもので、利息は毎年 1 月 31 日に過去 1 年分を支払っている。

第6問（20点）

第5問の期末整理事項等の仕訳にもとづいて、精算表を完成しなさい。